講演②　アトピー性皮膚炎の発症機序の時空間的理解とアレルギー克服を目指した研究

京都大学大学院医学研究科皮膚科学　椛島 健治

アトピー性皮膚炎は、慢性の炎症を伴う皮膚疾患で、激しいかゆみ、乾燥、赤み、びらん、ただれ、膿疱などの症状が現れます。主に乳幼児期から青年期にかけて発症し、一生涯にわたって続く場合があります。アトピー性皮膚炎は、遺伝的な要因が強く、家族歴がある場合には発症しやすいとされています。また、アレルギー、乾燥、ストレス、紫外線などの外的要因や、細菌やウイルスなどの感染症が誘因となることもあります。また、興味深いことに、幼少時期のアトピー性皮膚炎の発症を契機とし、食物アレルギー、喘息、アレルギー性鼻炎などのアレルギー疾患の連続的な進展を同一個人において認めること（アレルギーマーチ）が近年明らかにされました。これは皮膚を介したアレルゲンに対する感作が他のアレルギー疾患発症の根幹に位置することを示唆します。したがって、小児の時期からしっかりアトピー性皮膚炎をコントロールすることは極めて大切であると言えます。

治療は、かゆみを和らげるための抗ヒスタミン薬や、炎症を抑えるためのステロイド薬や非ステロイド薬などを使うことが一般的です。アトピー性皮膚炎は、完全に治癒することは難しい疾患ですが、適切な治療と予防策を行うことで、症状の軽減や再発予防が可能です。特に最近は、中等度から重症のアトピー性皮膚炎の患者さんの治療を目的とした新たな生物学的製剤や内服薬が開発されました。また、ステロイド特有の副作用が生じにくい外用剤の開発も進んでいます。

これらの薬剤の開発の背後には、アトピー性皮膚炎の病態の分子レベルでの理解が進んだ事が挙げられます。本セミナーでは、アトピー性皮膚炎の病態と最近の治療のトピックスについて説明します。また、最後に、私たちの研究室で行っている研究成果の一部をご紹介させていただきたいと思います。